



事例

1

総合学科高校

神奈川県立 横浜清陵総合高校

個性に合った 進路選択を実現する 「進学型総合学科」

横浜清陵総合高校(以下、横浜清陵)は、2004年、神奈川県立の県立高校再編計画で設置された総合学科高校である。2011年4月現在、19学級で生徒数は755名。この学校は、将来の職業選択を視野に入れた進路への自覚を深めさせ、生徒の個性を生かした主体的な学習に力を入れるという「総合学科」の理念を忠実に実践している高校として評価が高い。そのユニークな教育内容やその成果について岡崎珠苗校長にお話を伺った。

進学型の総合学科

大学関係者にはなじみが薄いかもしれないので、「総合学科」とは何かをまず述べておきたい。総合学科高校は新しいタイプの高校として1994年から導入され、通学範囲に1校、全国で500校の目標を掲げて整備が進められた。しかし、現在は全国で351校と目標の7割程度の設置にとどまっている。都道府県によって設置状況に幅があり、普通科や専門学科からの学科改編や複数校を統合して設置されるケースがほとんどで、教育内容も学校によってさまざままで、一言で総合学科の特徴を論じにくい。例えば、神奈川県の高校の場合は普通科の再編で設置されたケースが多いが、地方では工業系、農業系を前身とした総合学科も多いなど、同じ総合学科といってもバラエティに富んでいる。横浜清陵は「夢に向かってチャレンジする力を育てる」「社会の変化に対応し、時代を切り拓く力を育てる」「自らの課題を発見し、主体的に解決する力を育てる」ことを教育目標として掲げており、その具現化の際に参考にしたのが1993年の文部省(当時)の答申『高等学校教育の改革

の推進について(第四次報告)―総合学科について』である。この答申に書かれている進路を自覚させるメニュー、主体的に学べる体験型学習などを忠実に具現化した点に特徴があり、神奈川県立学校専門評価委員会の評価(大学の第三者評価に相当)でもこの点が高く評価されている。

また、大学・短大に進学する生徒が多いことも横浜清陵の特徴である。昨年度の進路実績は、大学53.6%、短大11.9%、専門学校17.9%、その他進学0.9%、就職7.3%、その他8.1%である。全国平均をみれば、総合学科の場合、大学・短大進学37%、専門学校進学30%、就職25%であり、これと比べるとはるかに進学率が高い。むしろ、普通科の状況(大学・短大進学63%、専門学校進学22%、就職8%)に近い。こうした意味で、進学型総合学科といえることができる。

3年間を通じた特色科目

上述の「第四次報告」(文部省)の内容を忠実にカリキュラムとして実現するために、オリジナルなものを手作りで作り上げた。総合学科高校では「産業社会と人間」「課題研究」を必須としているが、横浜清陵の場合はそれ以外に独自の科目を設定し、3年間を通じて段階的、発展的に学べる特色科目を有している点に特徴がある(図1)。

①「産業社会と人間」

まず1年次で「産業社会と人間」で職業や社会について



岡崎珠苗 校長

体験的に学び、2年次ではその発展科目として「コミュニケーション」が置かれ、積極的に社会とかかわる姿勢やスキルを身につける。社会人講話、事業所見学、福祉施設訪問など6つの単元ごとに体験しながら学ぶ場が用意されている。いろいろな職業についての情報を共有して、感じたことを発表しあうなかで、生き方・在り方を考え、職業観を醸成させる。

②「コミュニケーション」

2年次の「コミュニケーション」では将来就きたいと思っている職業や興味のある分野に関連する人に、生徒自身が一からアポイントメントをとる。何回か断られる経験もしながら、最終的には全員がインタビューを実施する。逃げられない環境を作ってあげることが大事だという。

岡崎校長は英語教員として授業をしているところから、「英語教育が実用的でないとパッシングされるが、日本の生徒はそもそも母国語で自分の考えをいう訓練が足りない」と、きちんとコミュニケーションのスキルを教える授業が必要だと感じてきた。実際に1年間で生徒たちは大きく成長し、自信をつけるそうだ。

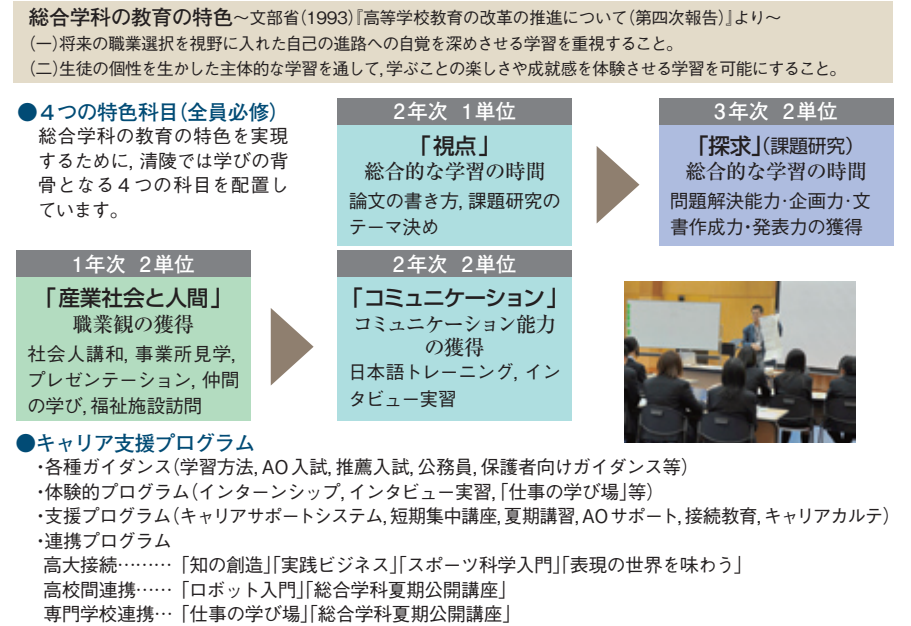
③「視点」

2年次には週1時間の「視点」科目も始まる。総合学科では「課題研究」の設置が義務付けられているが、「総合的な学習の時間」の1単位分をこれに充て、「視点」と呼称している。いわば、「プレ課題研究」のような位置づけの科目だ。前半は小論文指導で書く力をつけ、後半で「探求」のテーマ探しや準備の作業にかかる。

④「探求」

3年次の「探求」でこれまでの総合学科の学びの集大成として課題研究を行う。設定したテーマに10カ月ほどかけて取り組む。文献やインターネットを使った調べ学習だけでなく、学外者のインタビューやフィールドワークを活用することを指導している点にも特徴がある。これらの4科目では、すべて「事前学習→体験→まとめ→発表」と

図1 特色科目とキャリア教育



いうサイクルで実施されている。レベルアップしながらこの作業をくりかえすことで、着実に社会で求められる能力を獲得させる仕組みである。

こうした4つの特色科目の成果については、毎年度末に、全年次参加の「特色科目発表会」が行われている。各科目ともクラス発表会の代表者が年次発表会で発表し、その代表者がこの「特色科目発表会」で発表する。クラス、年次発表会では生徒が全員聞いた発表の評価を行い、それを集計して各代表を選出するという取り組みをとっているそうだ。今年は3月19日に「特色科目発表会」があり、筆者も見学させてもらった。「探求」の発表は3つあった。「高校生とFMラジオ」について調べた生徒は街に繰り出し取材をし、学内でアンケートをとり、イベントと組み合わせたFMラジオの可能性について探った。「布絵本」の魅力を調べた生徒はボランティアに参加し子供たちと布絵本で遊びながら、自分で布絵本を製作し、披露してくれた。「幼児向けの番組」について発表した生徒は幼児の発達とメディア理論について学ばただけでなく、実際に番組を制作し、それを発表していた。いずれもきわめて質の高い、魅力的な発表で驚いた。

教員、生徒自身が特色科目を支える

こうしたキャリア教育は全校体制で推進している。「産

業社会と人間」であれば1年生の担任、副担任の12名で運営する。「探求」は7クラスで28名の担当が必要で、これは教員の半分が担当していることを意味する。「特色科目研究会」を設置しているが、特色科目研究会だけで運営できるものではない。ほとんどの教員がどこかにかかわらないとまらない。総合学科の場合、こうした負担の大きさを考慮し、10名の教員加配がなされているが、それでも相当に大変だという。

はじめは全員が特色科目の初心者で教員同士が話し合いながら進めてきた。教員同士のチームワークもこうした情報交換のなかで発展してきたが、県立高校で教員の入れ替わりも多く、継承発展のためには相当の努力が必要だという。こういう学校に赴任した先生の反応は「おもしろそう」「大変なところに来てしまった」のいずれかだが、全員で協力しないと発展どころか、今やっていることの継承もできない。現在は設立8年目で、いろいろな資料(生徒のレポートや発表資料なども含む)が蓄積されてきたし、年間の授業計画は各回の指導項目、内容、狙いがマニュアル化されているなどのシステム化もほぼでき上がっている。また、ベテランと新任の先生と一緒に組んでもらうなどの工夫で、特色科目の継承に力を入れている。ただシステムを形骸化させないためにも、なぜ特色科目が必要なのか、情報を共有するための研修会や授業研究を行うことも不可欠だという。

開校から8年もたてば、当初の教職員が減り、理念や目標が薄れるのはどの組織でもみられることだが、岡崎校長は「生徒たちが引きついてくれている」という。例えば上述の「特色科目発表会」もそのための工夫のひとつだ。年次が上がるにつれて発表の質は明らかに高くなっており、「1年生で発表会を見た時からこの場に立つのが夢だった」と語った3年次の女子生徒がいた。また、情報系の科目を学んだ生徒たちが特色科目発表会で機器を操作し、司会運営もすべて生徒中心に行われていた。こうした身近なカッコいい先輩たちの姿を見ることが「自分も何かをみつけよう」という意欲につながっている印象を強くつけた。また、2年次の「視点」の授業では数年前から、11-12月ごろに3年生に来てもらって話をしてもらい取り組みを始めるなど、上級生や卒業生が下級生にアドバイスをする機会を作っており、生徒同士での学校文化の継承がうま

く機能している。もちろんシステムができ上がっているからこそ、継承が可能であることは言うまでもない。

ユニークな教育を支えるサポート体制

①きめ細かなキャリア支援プログラム

こうした特色科目以外にも、一人ひとりの生徒を支援するキャリアサポートが様々に整備されている。例えば、AO入試や推薦入試で大学進学を目指す生徒にはその実現をはかるために、マンツーマンの指導をしている。AO入試は得意分野を生かせる受験制度のひとつなので、AO入試で大学に進学する生徒が多いが、こうした教職員の手厚いサポートにより、「より高いレベル」の進路選択を可能にしているという。また就職する生徒は毎年10名ほどだが、開校から100%の就職率である。総合学科では一人ひとりの個性に沿ったキャリア支援、進路指導を掲げているが、その実現のためには総合学科加配があっても足りないほどだという。

②地域連携で学校運営

また、体験型学習を大切にしており、地域や社会との連携を重視している。地元の企業、大学、専門学校と様々な場面で協働し、助けてもらっており、例えばインターンシップは神奈川経済同友会が紹介してくれるというパイプで充実した内容が可能となっている。高大共同の授業も4つ開講している。普通科同士の再編のため、専門性が薄くなりがちであるが、これを大学との共同授業でカバーし、さらに大学での学びへのモチベーションにつなげるという副次的な効果も狙っている。

このように横浜清陵では個々の生徒の個性に合った指導をするために手厚い教育体制をとっているが、まだ総合学科そのものに対する理解も十分に進んでいないし、先に述べたように総合学科の中でも、横浜清陵の教育は特に特徴的だ。こうした取り組みを中学生や保護者、中学校の先生に知ってもらうために、生徒スタッフが説明者となる学校説明会を開催し、高い効果を上げており、このような広報活動には今後も力を入れていきたいとのことである。

経営的視点からもすぐれた高校

大学においてもPDCAサイクルの実現が課題となっているが、こうした観点においても横浜清陵の取り組みはき

わめてすぐれており、参考になる。

初代校長に神奈川県立高校で初の民間出身者をむかえて、新しい学校を作ってきたが、民間の経営手法を参考に、開校時から中期経営計画を策定してきた。また、学校経営理念として「個性に適った進路選択の実現-より高いレベルで」「社会性の尊重」「地域社会との協働」「活性化した組織の実現」の4つを掲げている。組織の活性化を学校経営理念のひとつとして掲げている点も独特だ。「教職員に元気がない組織で生徒に元気が出るわけがない」

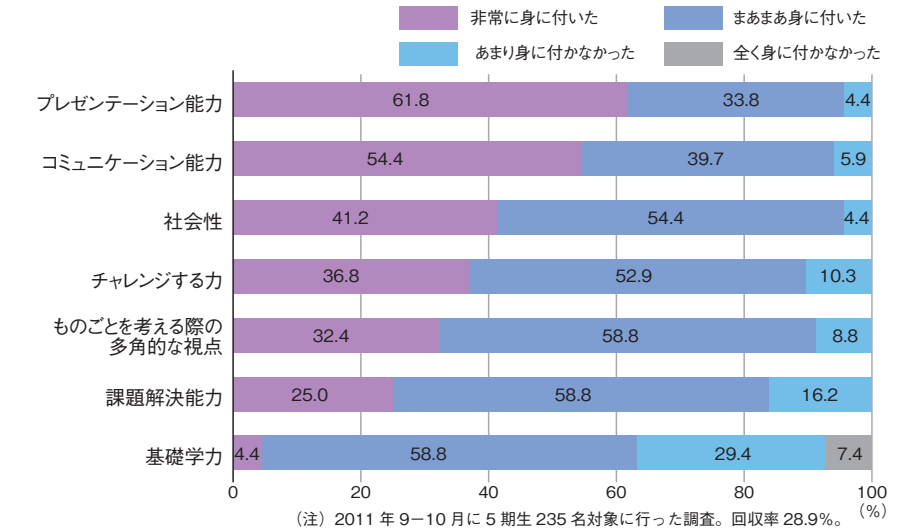
という思いから掲げたそうだが、組織の活性化を教職員が常に意識するためにも、学校経営理念に掲げていることが重要だという。

計画の策定だけでなく、評価活動をきっちり行っている点も重要だ。最初の卒業生を送り出した5年前から毎年、卒業生アンケートを行ってきた。教育の効果をその時々での満足度や卒業時点で測るのでなく、卒業後から半年たった9月に実施している。他の高校卒業生との違いを感じるこの時期に調査することで高校教育の効果を測定できると考えている。実際の結果の一部を図2に示した。大学教育においてもその獲得が大きな課題となっているプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などがよく身に付いたと生徒たち自身も高く評価している。また大学等を卒業し、社会に出た1,2期生を対象としてキャリアガイダンスの視点から新たにアンケート調査を行い、今後の教育改善に生かしたいという。こうした教育の効果を丁寧に検証する取り組みの重要性は誰もが認めるところだが、実際にここまで丁寧にやっているのは高校でも、大学でも珍しいのではないだろうか。

接続がスムーズになる大学教育を

特色科目については生徒たちも熱心に取り組み、コミュニケーション能力などは目に見える大きな成長を遂げているし、見えにくい部分だが、「社会に出て役に立つ人間になりたい」という思いが育っていることも生徒たちと接す

図2 横浜清陵で身に付いた力



る中で感じているという。こうして特色科目は一定の効果を上げており、維持発展させると同時に、普通教科・科目についても授業力向上を図りたいという。特色科目と通常の科目を両輪で学ぶことにより進路の可能性も広がるし、しっかり学ばせるための仕組みをどの科目についても入れていくことが重要だ。「育てたい生徒像を実現させるために特色科目が有効に機能しているか、どの科目においても教育目標を意識して取り組み、授業改善に組織的に取り組むことが必要だ」というのは大学と全く同じ課題を抱えており、非常に興味深く思えた。

最後に大学に対する要望についても聞いてみた。「こういう高校があることをまず知ってほしい」と岡崎校長は言う。独自の教育を生かすような「キャリア教育接続入試」を始めてくれた大学もあり、励みになるし、高校側としてもこうした教育を評価する進路開拓をさらに広げる努力もしたいという。また高校と大学ではレベルは違うが、将来社会に出た時に役に立つ「汎用的能力」を育てたいという目指すものは変わらない面も大きく、「接続がスムーズにいくような大学教育であってほしい」という。特色科目の内容と大学の初年次教育で行っている内容が非常に似ているという感想をもったが、こうした高校教育の取り組みが広がりを見せるのであれば、より効果的な初年次教育、大学教育の在り方を模索していくことが重要だと感じた。

(両角亜希子 東京大学大学院教育学研究科 講師)